觀世流改訂謠本

番外三

三曲

三讀物

特116
692

始

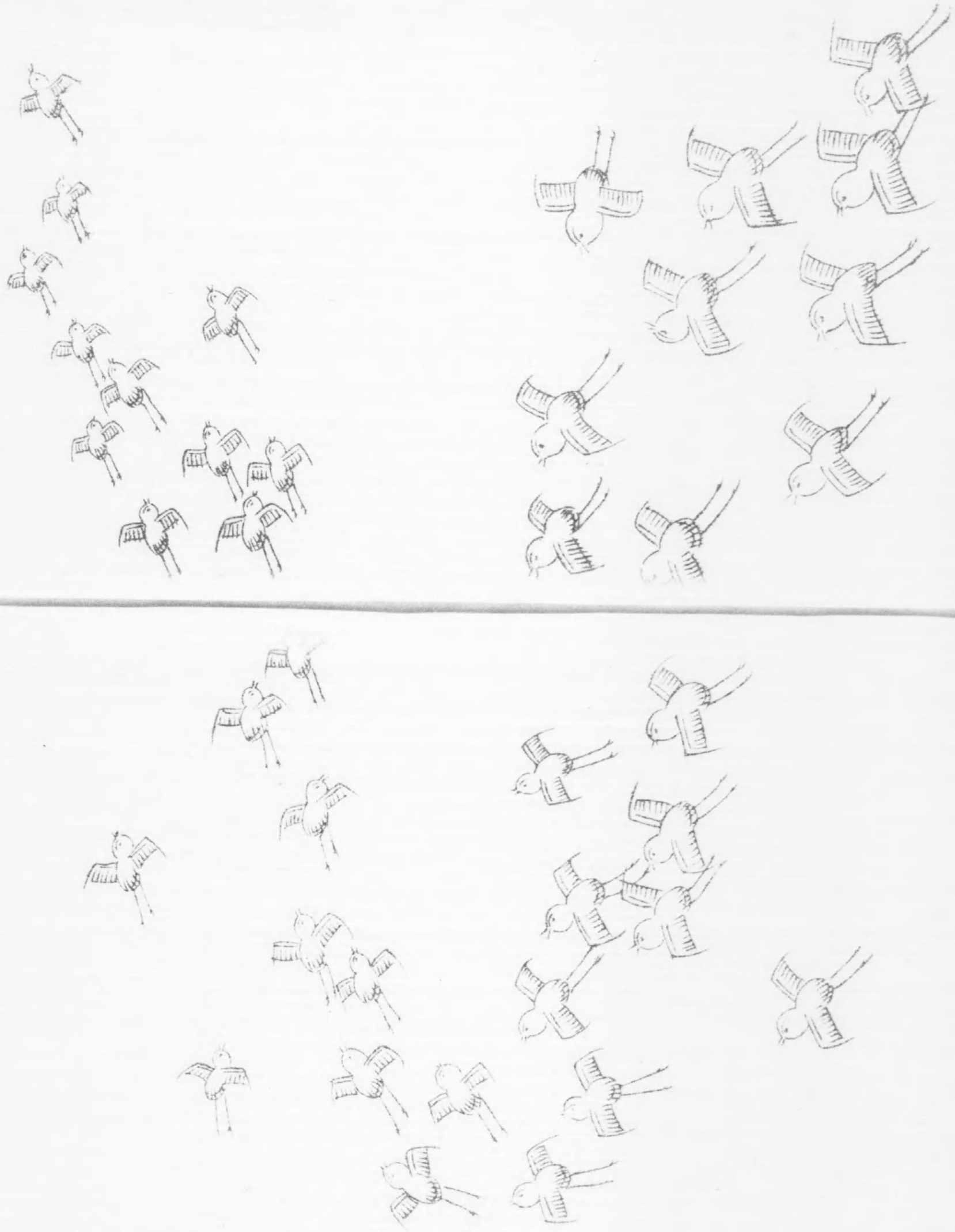
觀世流改訂謠本

番外三

三曲

三讀物

特116
692



觀清之印

特116
692

宮内省圖書寮

二曲

初賴六代
東國下
西國下

二二讀物

願書
起請文
勸進帳

大正
14. 10. 8
内交

初頼六代

サシ上

ヨワク（拍子不合）

それ世間の無常は旅泊のゆべよ
現れ有為の轉変は草露の風よ
滅まるが如し。われ「所不住の泡」
として。縁に任せて諸國を廻る。名所
舊跡ありつゝ。捨てゝ交るちりの
世の夢も現も隔なく。好去脚来の

境界に至る。こゝより大和の國初瀬の
觀世音へ靈驗殊勝の事なれば。
暫らく糸籠しの山寺の致景を見
る（下歌中）よ　山そびえ谷廻りて人家雲（上歌）に
よつらなり晩鐘雨に響きぬ（初切ヤ）川
隈もおぼろに暮れゆく雲の波。おぼろ暮
れゆく雲の波。さゞなみの如くなりて。

補陀洛も隱口の初瀬の寺にあり
ゆたかや。げにや海人小舟はつせの山よ
ふる雪。詠みしもさぞなかなく川の
浦の名もある景色なる浦の名もあ
る景色なるこゝよあされなる事のは。
古堂の西のつまより高きつらひて女性
の籠りけるが。身なほ思ありと見えて。

カゝる上に、恐びかねたる言の葉の色よいで
（柏子不合）
音は立てども。唯泣くのみある有様
なり。ある時女房たちと思しき人。
局堂の四面をまもり。千度のあゆみを
運ぶと見えしが。いまだ數も終らぎ
るに。おわたくしく局より走りのり。唯
今あさましきことを聞きてゆく。

駿河の國の千束の松原にて。平家
の棟梁六代君前の斬られ給ふを。
カゝる上に見ていと申まほしき者のいと。申しもあへぬ
伏しまろびたり。そのときの女房。
さりともとこそ思ひつるに。さてはや
斬られけるかと。聲も惜まぬ伏し
まろび給ふ。すでに六代の母なまし

まゝ、けるよと。その時とそ人も思ひけれ。　傳へ聞く孔子は鯉魚より別れて。思の火を胸よりたき。白玉易は子をさきだてゝ。まくらよ殘る藥をうらむ。　これ皆、仁義禮智信の祖師。文道の大祖たり。況や末世の衆生をいひ。おかも女人の身として。恩愛の

別を悲むこと。げにもまことよ理なれども。そのことわりも過ぐるばかりよ。よその袖もうるほへり。やゝあつて母ぜ前。涙をおさへてのたまはやう。さるをもわが子をば。上人の御助けをこそ頼みつるよ。そのほうひもおきやらんもしいまことよ斬られなば。齋藤五齋藤六。

老りも来りて申まべきよ。たづよそゞ
のつてよだよ。早くも陶ゆる程あるよ。
何とそかれらん屠しきやらんと。聲も
惜まぬ言の葉の。色も心もまさり草。
何をうたねと。思ふの。憂せよのとる。
身ぞつらき（拍子合）初瀬の鐘のとゞつく
づく思へせの中ハ。諸行無常のことわり。

かりは見ゆる親子の。夢まぼろしの
時のまとかねてハかくと思へどもまことと
別はあるときぞ。思ひし心も打ち失せて。
唯くれくと堪へぬる。胸の火ハとゞ
れて身ハ消ゆる心のみあり。さるとても
我が子の失ワれんと。知れ
どもあはやさりともの。頼をかけま

柏子板
力力寿
又特ニ
力力寿

くもかたじけなくも唯たのめ南無や大悲の観世音願くハ本よりの誓願よ任せつ念彼観音力力寿

投ゝの功力げよいつもらせ給ぶべ

つるぎもも折らせて我ゞを助け給へやかりける所よ男一人来りつ

齋藤五来りたりと申せば母も

柏子板
駿河の千本もて
又地柏子
駿河の千本もて
駿河の千本もて

いろくとのたまへば喜びよりあり

たり駿河の千本求めて既よ斬られ

きせ給ひしよ人その時よ駒をはや

めて走りおりよろこびの法教書よて

助からせ給よりし申せば母も餘り

の事のところよ嬉きとだよもわ

きまへぬ唯茫然とあきれつあり

嬉しき（不引特）

がたのとそやを手を合せ給ふ袖よも。
賢えぞ落つる涙の。嬉しき袖を
たよほさぬや涙あるらん

△印ヨリ謠フ

クリ上
ヨワク（拍子不合）そもくとこの盛久と申さば。平家讃代
の侍。武略の達者たりしかば。鎌倉
殿まで召しなれたる。つわものなり
サシ上
ツヨク これまで計らひがたしとて。関東へ
わたし遣する。花の都を出でしより。
音に聞きそめし賀茂川や。末白河

をうち渡り。粟田口なども著きしかば。
今は誰をか松坂や。四の宮川原四
の辻（柏子合）　新切　関の山路のむら時雨。いそ
袖やぬらすらん。知るも知らぬも逢
坂の。嵐の風の音さむき。松本の宿
より打出の濱。湖水より日の影見えて。
水より波やたつむらん。越を辭せ

地柏子
むかし長柄の

范蠡が扁舟より棹をうつまである。五
湖の煙の浪の上。かくやと思ひ知られ
たり。むかし長柄の山里も都の名を
やのこすらん。石山寺を拜めば。これ又
救せの悲願の。ありがたき。ちかひ整。
頼もしくぞやおぼゆる。勢田の長橋
やげ見えて。長虹波より連れり。憂世

の中を秋草の。野路篠原の朝露。
おき別れゆく旅の道幾夜か夜をかさ
ねぬらん 上 露も時雨ももる山ハ。下
葉殘らぬもみぢ葉の。夕日よ色や
まさるらん。いまへ今をかぎり山形を
誰ゝ忘るべき。いまむ心ハ無けれども
其名ぞ有りハ哀作の宿。まだ通路も

磨ぎし 三

都の 上

濃草野の。小野の宿より見渡せば。
分て磨き針や。番馬と音の
聞えしハ。此山松のみあらし。旅寢の
夢も醒ゞ井の。みづから結ぶ草枕。
誰ゝ宿をも拾原。月もまれなる山
中よ。末破の閑屋の板屋。ゆくゝ
らぬ旅よだよ。都の方ぞ戀しき。

垂井の宿を過ぎ行けば、青野が原に
名のみして、皆々霜の白妙、枯葉よ
もる草もなし。やがて憂世を青墓や。
捨てぬ心を杭瀬川。洲の俣海馬の
渡りして、下津や津うち過ぎて
熱田の宮よ来れば。草薙宮に名のみ
きて、形弊よ迫き此身の不死の薬

杭瀬川

下津かや津

地柏子

蘆向の

又

蘆向の

やあらうらん。蘆向の風の鳴海潟干
ばつるを捨小舟さして沖よや出で
ぬらん。さがよの蜘蛛手よりあるハ
橋や。澤邊遠よ匂ふ杜若。在原の中
將のはるゝ来ぬ。と詠せしも今身
のよる。知られたり。ちほ行く末白
真弓。矢矧の宿、赤坂。松よりかれる

藤枝の宿の紀を宮路山。わたりて。
今橋打ち渡り。雲と煙の二村山は
旧本 盡くらん アリ
高師の名のみして野里よ道やつづく
二ウ 上 波のみちひのみ見坂蒼海天
地拍子 雲よとぎ入る
らん
二ツ
よ連りて。雲よとぎ入る沖つ舟呉楚
不引(特) ことを
東南よ入れて乾坤日夜うかめり。
常らんことを白須賀よ暫しありみる

水島の下安からぬ心かな。みほの
おくりけん 又 おくりけんぬハ
ぼる橋本の濱松枝の年ぐよ幾
横雲の
春秋をおくりけん山ハ後の前澤。
夜ハ明方の遠ぬよ。はや横雲の東
馬より天龍川も見えたり。袁へはつ
る姿の。池田の宿鷺坂。旅寢よだよ
もなれぬれど。夢も見附の國府と

やゝ岸遠よ波を掛川に。夜の中山
あらくよ。命のうちハ白雲の又ゆ
べーと思ひきや。憂き事をのみ菊
川や。旅のつゝれの駒場が原。寒る瀬
の大井川。川邊の松よとゝちん
花むらさきの藤枝の。暮春かけて
白ふらん駿れなり。旅のゝもだよも。

地拍子注意
葛の細道以下
夢よりありぬ。こん
マデ賀茂物狂ニ
在ル同句ト同様
ニ取ルモ可ナリ

きゝ馴れ衣ニモ
宇津の山ニモ

拍子扱
思ヒ出トモ

心岡部の宿。やゝ。葛の細道分け
過ぎて。きゝ馴れ衣を。宇津の山う
つゝ夢よりあらぬ。清よ白く引く
綱の手越の川の朝よ。思を駿河
の國府を過ぎ清見が関のあらく
よとまらぬ旅やうゝ。薩埵山よ
り見渡せば。遠く出でたる三保が崎。

ぬらもらん
迫くなる
又ここに迫くなる
地柏子
あらぶわまき
又
あらぶわまき

海岸そこらも白浪の。松原ごしに眺むれば。稍よりよりまる海士小舟。あまりよ袖やぬらもらん。由井蒲原もも過ぎ。かが。田子の浦曲もわくなる。西天竺土扶桑國。あらぶ山あき富士のねや萬天の雲を重ぬらん浮島が原を過ぎ。かが。ひだりハ湖水

浪沒深水

波よせて。蘆葉深水の浮島の。上毛の霜をうち拂ふ。ハ蒼海遥て。漁村の孤帆かもうなり。頓教智解の衆生の。火宅の門を出でかねー。羊車鹿車大牛の車返ーハ。これかそよ。伊豆の國府も著き。かが。南無や三島の明神。本地大

地拍子
長閑冥の巷まで、われらをも

通智勝佛過去塵點の如くまて。
黄泉中有の旅の空。長閑冥の巷
までもわれらを照し給へと。楽くぞ
紅誓申しける雲のふる枝の枯れて
だに再び花や咲きぬらん

サシ上ツヨク（拍子不合）

西國下

寿永二年の秋の頃。平家西海より
走き給ふ。城南の離宮より主上都を
隔つる山崎や。閑院の院より玉の輿
をかきまゐて。八幡のかたをふし拝み。
南無やハ幡大菩薩。人皇始まり給
ひて十六代の尊主たり。吉哀曜月の

西海の

加護もなく
又
加護もなく。

底清く。志を受けつぐ所恵。なごり。捨てきせ給へべき（和子合）他の人よりも我が人。誓をせ給へるものを西海の浪の立ち返り。毎び。帝都の雲を踏み九重の月をあがめんと。楽く祈誓申せども。悪逆無道のそのつもり。神明佛陀加護もなく。貴賤上下よ捨てられ帝城の外よ走く。何とあり行く水無瀬川。山本遠く廻り来て。昔男のねよ立きし。鬼一口の芥川。弓やなぐひを携へて駒よ任せてうち渡せば駒はし都を立ち出でいづくよ猪名の小野原。一夜假寝の宿かな。蘆の葉わけの月の影。隱れてせ

千町の

龍津白波
音たてし人

める昆陽の池、生田の小野のあのづから。此川浪は深寝せ。鳥はいねどもいうあれば。身を限りや歎くらん千山の雨は水まさり。濁れる時は名のみして。さらぬひあき布引の龍津白波音たてし雲のいづこは流るらん。五手舟の名殘は。五百艘の舟を

泊あれし福原の。

鶴

やくまむらは

作りて。古調をたえぞ運びしも哀庫の浦こそ泊あれ。福原の故郷は著きしかば。人どの家も年の三とせよあれはてて鶴・松・桂の枝は鳴き。狐・蘭菊のくさむらは隠れ住む。馬れ名殘も波風のあら磯館住みは捨てて。唯海人の住みどころ宿も

地拍子
おれし。處ども

金玉を

憑しかりける

宮めの假寢かな相國の作りおかれし處ども荒れはて。古宮の軒端に月もり金玉をまきへし粧ひ。花の轜をあつめ。今も唯今のやうよ思ひれて昔ぞ憑しかりける　釋迦一代の藏經五千餘卷を石よ書き蒼海の底よ沈めて。一居の島を築き

地拍子
數千艘の舟を
留め風波の

よるべ

かが。數千艘の舟を留め風波の難をたまけ。ありがたかりしかたみなり。せをうき涙のよるべなき身のゆく末ぞ悲しき　サシ上　かくて皇上をはじめ奉り。皆ア舟よめされけり。おらそぬ旅のうき枕。思ひやることそ悲しけれ　上　南殿の池の龍頭鷁首の船ぞと。

（拍子不合）

磯千鳥

思ひあがらも寒ばよ。釣の翁の棹の歌（拍子合に心こ）
まだ聞き馴れぬ聲ぞよ。沖なるかも（拍子合）
め磯千鳥友呼びつれて立ち騒ぐ。風
帆波よさかのぼり。櫓聲ハ月を動き。
和田の岬を廻れば。海岸遠き松原や。
海の緑よつづくらん。須磨の浦もか
りしかば。四方の嵐も烈しくて。角吹き

見られぬ

こゆる音ばかり。うしろのかのみ煙。
紫そいろものあまをぶるも見られぬか
なのあれてあり。琴の音よ。引き
あらると詠じけん。五節の君の此
浦よ。心をとめて花紫舟。昔ハ上り
今ちる波路の末ぞはるかき。かたむく。
くに月の明石潟。六十あまりの年を

高砂やこの

経て。向さぞ語りのいまへを思ひ
やることやかしけれ。船より車よ乗り
うつり。暫しとてきよと思へども。須磨や
明石の浦傳ひ。源氏のかよひし道
あれば平家の陣よかいうづそそまた
この浦を漕ぎいだせば。瀬ハ波も
高砂や尾上の松の夕嵐。舟をいづ

笘館やげハこの

まことよ

四ッ地
賤ノ民のおまへの閑

くよさそよらん。宮の白の笘館やげハ
隙もるる月夜。遊女の謡ふ歌の道。
涙せを渡る一ふしもまことよ哀なり
けり。羽をぬ旅ハ半窓の。瀬戸の落
ばし心せよ。げよあらけなき武まのお
づさの弓の鞆の浦。賤ノ民のかまぞ
の閑夢路をさそよ浪の音 上 同

落ち島鳴いて。霜天よ満ちてまさ
まく江村の漁火もほのかよ半夜
の鐘の響き。客の船よや。遠ふ。遠ふ蓬
窓雨滴りて知らぬほ路の揖枕。片
敷く袖や志をるらんあら磯浪の夜
の月沈みー影ハ帰らぞ

柏子板
船よや。

夜の月

願書

ツヨク
何ら帰命頂禮八幡大菩薩ハ。日域
朝廷の未至。異世明君の暴祖たり
寶祚を守らんがため蒼生を利せんが
ためよ三身の。金容をあらわして。三所
の権扉を。おし開き給へり。爰よ志き
りのそ。より此方。平相國と。いふもの

(柏子不合)

(柏子合)

蒼生を利せんが
又蒼生を利せんが
三躰の
三所の権扉を
権扉を
開き給へり
地柏子
爰よ志きりのそ
より此方。平相國と
爰よ志きりのそ
より此方平相國と
× 替行切

地拍子
いふもの有て
地拍子
四海をたなごころに
萬民を
惱乱せ
むこと
れ。佛法の仇
をばの敵
なりそも
〻。曾祖父前の陸奥の守。
曾祖父前の陸奥
の守。名を
宗廟の氏族
帰附
其後亂
だの大功を
名を宗廟の氏族より帰附て。義仲い
やしくも。其後亂そして。この大功を
おこすこと。たとへば聟の嘉を以て。
地拍子
巨海を隔て
巨海を隔て。幅輻ゞ分をとつて。隆

如くなり
地拍子
然れども
車よ向ふ如くなり。然れども君のため
起ものみなり。仍て
地拍子
勝つことを完め
國の為よこれを起ものみなり。仍て
願をくは。神明納受垂れ給ひ。勝つ
退け給へ
ことを完めつ。仍て四方より退け給へ
壽永二年五月日。高らかに讀み
讀みあげたり
別に出て
義仲願書よ
上げたり。義仲願書を鏑矢に神
地拍子
前に捧げ申せば。供のつもものど
供の

（トルナシ）
（間ナシ）

も、上矢の鏑をひとつづ。かの寶
前ゝ捧げて。南無帰命頂禮。八幡
大菩薩。そて皆禮拝。を系らまる

地柏子
泰山府君
柏子投
ヲ下界の

地柏子
富士浅間
地柏子
熊野之所

起請文

敬（ツヨク）つて白（モオ）す起請文の事。正（カミ）ハ梵天
帝釋四大天王陰魔法王五道の冥
官泰山府君。下界の地ゝハ。伊勢。
天照大神をはじめ奉り伊豆ハ箱根。
富士浅間。熊野三所。金峯山。城の
鎮守稲荷紙園賀茂貴船。八幡

地拍子
總じて日本國の。
大小の神祇冥道
請じ奉る。驚かし奉る
又地拍子
總じて日本國の。
大小の神祇冥道
請じ
（此拍子ミテ大小の以下
四地、習ヒモアリ）
習ヒ
氏の神。全く
地拍子
これあらば。
地拍子
來世ハ阿鼻よ。
起請文

起請文

三所。松尾平野。總じて日本國の。大小の
神祇冥道請じ奉る。殊より氏
の神。全く正尊。討手より罷り上ることあり。
此事いつもりこれあらば。この誓言の。罰
罰の當り。來世ハ阿鼻よ。墮罪せられん
ものなり仍て。起請文如くの如ごと
元年九月日。正尊と。讀み上げたり

勸進帳

勸進帳

本より勸進帳あらざることを。數の中
より往來の巻物一巻とり出し。勸進
帳と名づけて。（拍子木）中たかあらかことを讀み上げ
けれそれつらく。（拍子合）惟んみれば大恩
教主の秋の月。涅槃の雲は隱れ
生死長夜の長き夢。驚かさべき人

地拍子
隱れ生死長夜の

地柏子
皇帝と

柏子扱
貫く

又地柏子
貫く

地柏子
おもひを

又柏子扱
おもひを

も。前世にてよもぎこそ帝おちうまれ。
中ごろ。聖武皇帝と。ひざつけ奉り
最愛の。夫人よわれ。憂慕やみがたく。
涙眼よ。暮れく。玉を貫く思ひ。善
逆よ。ひるがへして。盧舎那佛を建
立まし。ほどの。霊場の。絶えん事を
悲みて。後業坊。澄源。諸國を勧

奉財の。
地柏子
奉財の

地柏子
當来ハ。

地柏子
天も。響けと

進まゝ。紙半銭の。奉財の業ハ。此世
よそに無しの。楽よ。ほとり。當来ハ。
数千輩。華のよ。坐せん。時命。積善。
敬て。白さと。天も。響けと。讀みよ。
なり

大正十四年十月五日印刷
大正十四年十月十日發行

觀世流改訂謠本
大正十三年版

訂正者　丸岡桂
東京市神田區今川小路三丁目九番地

發行者　土居源太郎
東京市神田區東松下町十二番地

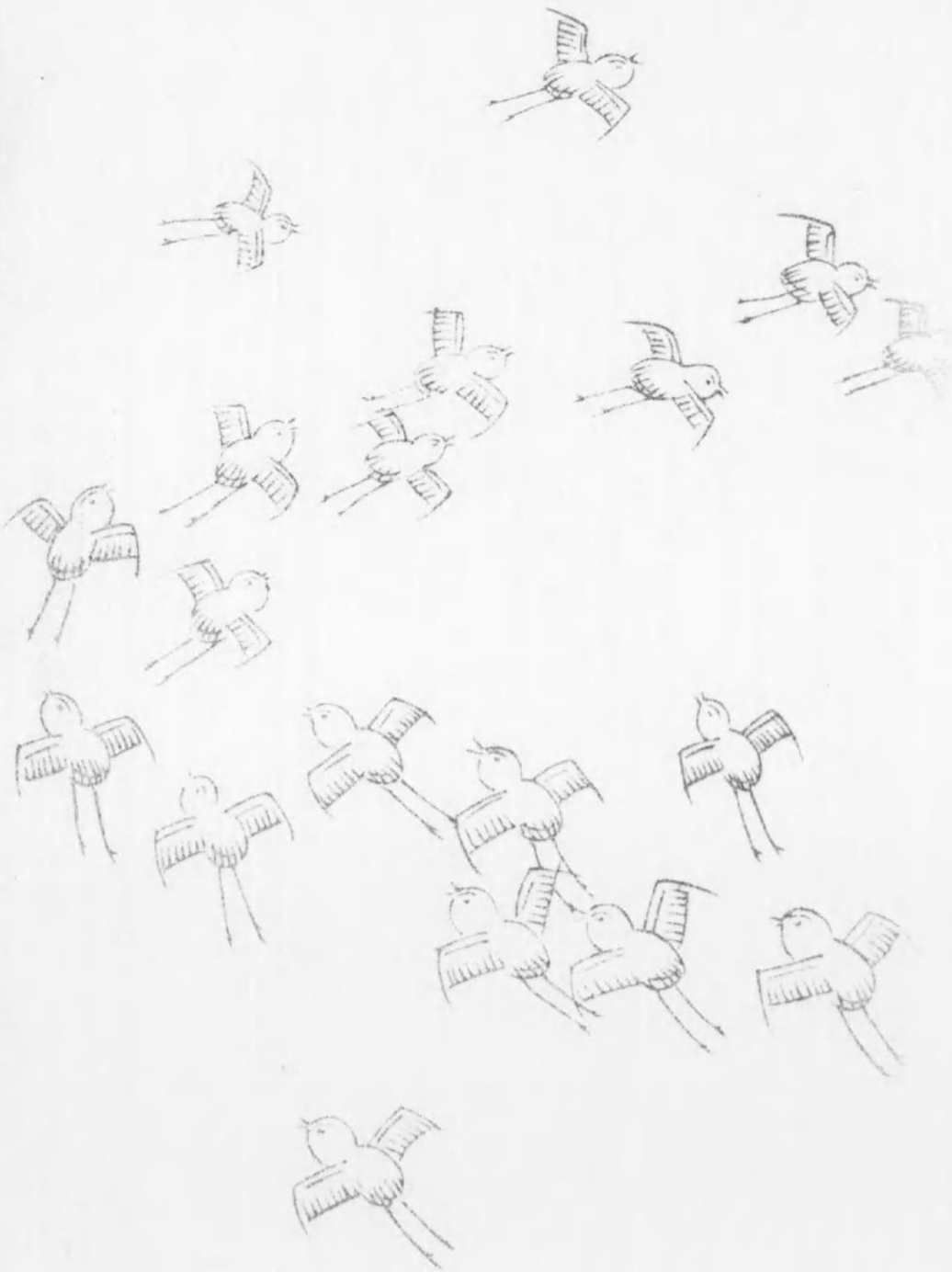
印刷者　鈴木彌作
東京市神田區東松下町十二番地

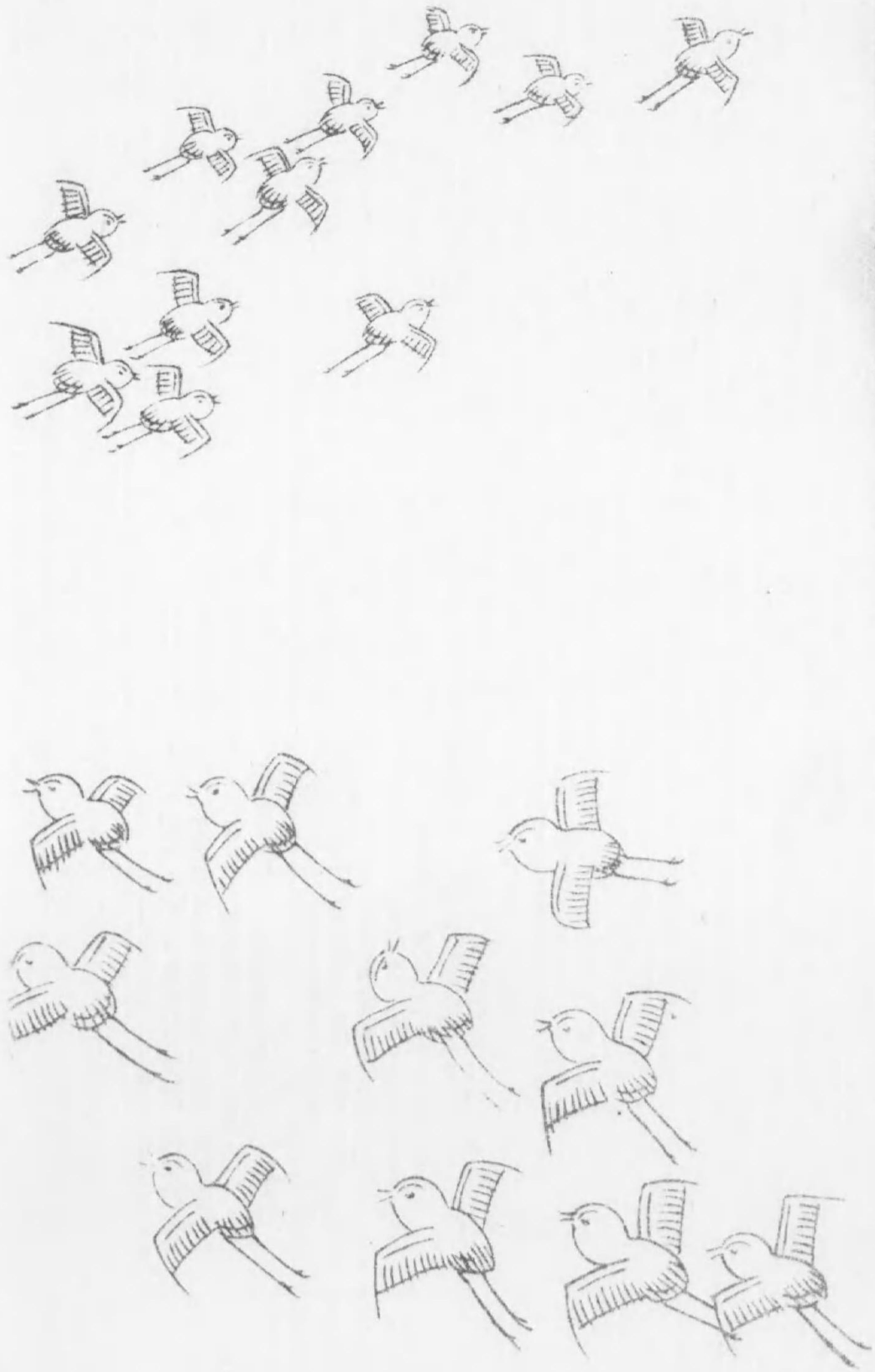
印刷所　信英堂印刷所
東京市神田區今川小路三丁目九番地

發行所　觀世流改訂本刊行會
電話四谷五九五七番
振替東京一三四七五番

藏版權
所有者
御復製

306
849





終